

### 3 私の来歴 または 松下昇論

#### 1 思い出

学生時代に私はマルクス主義の洗礼を受けた。それまでのペシミスティックな、また自然主義的な現実主義の閉塞から抜け出すために、「世界の解釈から世界の変革へ」赴いたという風に当時の私の精神状況を説明してもよいかもしれない。

しかし、常にマルクス主義的な唯物論、経済学説には疑問を持ち、運動に違和感を覚えながらも、諸々の党派闘争にお付き合いもした。当時の学生運動というものは、やはり、生活者の、労働者の組合運動とは、かなり違った側面があったように思う。生活の経済的矛盾、資本と労働者との直接的な矛盾という点からの運動というよりは、むしろ、もっとインテレクチュアルなものであったと思う。だから、運動は社会的な交渉と権利の確立といった具体的な問題よりも、むしろ、政治的、文化的なラディカリズムへ傾斜しがちであった。

そして、彼岸に、なにやら『革命』があるといった一種の永続的な妄想に賭けながら、無限回の敗北を重ねていった。また、なにやら、この経験が革命の予備体験、一種のリハーサルのようなものだ、といった愚にもつかぬ慰めを抱きながら、それ故にいっそう醜悪な党派闘争を展開していった。ある者は、学生インテリゲンチヤとしての自己を1905年のレーニンに比して気慰みとしたり、有る者は、大学を去って『プチ・ブルインテリゲンチヤとしての自己』を精算したりした。

彼等の全てに共通していたことは、運動の必然性という惰性力に抗しきれないことであった。運動が起こる時には動かず、運動が破滅する時には動くといった自在さに欠けていたことだ。諸々の方向への自在な舵捌きができるような豊饒な思想的営為をもっていなかったから、いわば、矛盾の否定的な力に圧倒されて、立ち上がることができなくなった。つまり、市民社会と和解して、革命妄想を精算するか、より格調低く妥協して、小市民運動を継続するか、といった具合だった。それから、ついでに、知盛のように、「見るべきものは、見つ」と独りごちることであった。こういった徒輩に欠けていたものは何だったのだろうか。それは、倫理感や、良心やの欠如といった問題ではなく、むしろ『生きんとする意志』に対する根本的な誤解に根ざしていたと思われる。

ある日、『無条件降伏せよ』という命令が下った。何の戦利品もなく、何の交渉による合意もなく、力がより、上級の力によって圧伏させられた。

『降伏』とは断念であり、敗者として、問題から離れて行くことである。《問題》からの離れ方には様々にあったろう。無条件降伏もあれば、玉砕もあれば、法的な争闘もあれば、国家とのストレートな激突もあった。また、乗っ取り亡命もあった。国家という軸を巡って『帰順』とは何か、が問われた。しかし、多くのものが見誤っていたのはバリケードという『力』を支えている『力』とは何かという点であったろう。その『支え』は見掛けは強そうに見えた。大学の機能はストップした。大学というものはそれほど権力に庇護されていなければ弱いものだったのだ。

しかし、『力』を見誤ってはならない。《物理的な力》は、ただ条件反射としての筋肉が運び得る力にすぎない。システムを作り続け得ない自己運動しない『力』とは要するに泡沫にすぎないのだ。経済的な力、政治的な力をもっと重層的なものであり、財や、法の駆使によってシステムティックに仕上がっているものだ。たまたま、法による物理的排除というものは警察機動隊や自衛隊として存在する。が、それらの破壊力は極めてシステムティックなもの構造的なものである。だから、この構造の物理的な部分だけを攻撃しても、それは次々に補充され、再生され、結局システムとして壊れない。革命の肉弾戦を青春と誤認するという笑うべき『ラジカリズム』とやらも、いわば、『生』に対する誤解に根ざしているものである。

ところで、『降伏』とは……。

ある夏の日、私は宿直のアルバイトで官舎のテラスに居た。陽は暑く、路面を照らし、乾いていた。居るものとしては私と一匹の犬だけである。私はセリーヌのように孤独だった。

時が経っているのに哀しみは、いつまでも断え間なくやってくるのだった。もはや、気が狂う道しか残されていないのに、それでも、耐えているという時間の無駄さ加減に私はうちのめされていたのだろう。ディオゲネスのように、私は影を追い払うことができたらよかったのに。しかし、陽は、ただサラサラと流れているばかりだった……。

哀しみの感情としては、そこに川端の「雪国」や、井上靖の「北国」のポエジーがあった。歌手、奥村チヨの「北国の空」といったものもあり、森や、街灯や星も残されていた。私は、街の灯に憧れたり、女の愛に飢えていたりした。

つまり、学生インテリゲンチヤの残骸から見ると妙に世間は艶っぽく見えたという訳だ。しかし、私は何処にも自分の席はないのだ、と感じていた。さよう、《ヴェネチアの夜》のような浄福などというものは、そこにはなかった。「薔薇よ、大いなる矛盾よ」といった幾枚もの薔薇の花びらの重なりの中で私は女のこの上ない抽象的な愛と、同時に市民的な幸さえ希求していたのだ。

私は懐かしく思い出している。運動の終焉した頃の虚脱の中の歩行。港近くの喫茶店で連合赤軍事件がエロ・グロの手法でマンガ週間紙に猟奇的に描かれていたのを手にしたことを。何を思ったのか、「赤銅鈴之助」が突如、さる雑誌に載せられており、連合赤軍は鬼の面をかぶった異国人とされ、鈴之助は真空切りでそういった夷狄を爽快にやっつける人物として描かれているのだった。その唐突さに驚くと同時に深い深い闇の虚脱はいっそう拡がるばかりであった。

ある雨の日、港に私の友人が辿りつき、一升ビンを提げて下宿にやって来るや、わびしい敗北の総括を延々と繰り広げていつの間にか寝入っていたりした。

友は、さる鉄鋼会社に就職するための面接にやって来たのだった。

時は確実に経っていき、老いの繰り事を一掃していった。その年は、妙に雨の多い年だった。港の灯と、雨のしずくのしたたりばかりが、妙に記憶に残っている。

## 2 松下昇

全共闘の終焉にあたっての最後の華は、連合赤軍でもなく、「よど号乗っ取り」でもなかった。それは、まさしく壮烈に執拗に＜全共闘＞を闘い抜いた人々、なかならず＜松下昇＞という固有名詞に象徴されるものである。

しかし、松下昇は、全共闘の『いけにえ』であり、全共闘の責任を一身に背負い、権力の憎しみの標的となった。驚くべきことに彼は、彼自らそれを志願したのである。権力の側（司法・警察権力、大学の権力）から、彼は最も憎まれ、スケープゴートとして選ばれた。降伏した者達、帰順した者達については体制の側に寛容があった。たぶん、それは学生であったからであろう。しかし、この社会に永遠に『否』を言い続ける者を権力の側は許しておく訳にはいかなかった。権力との差異を容認しないアナキズムを権力は、また一つの『権力』と見た訳だ。丁度、秀吉が利休を憎んだように。また、ローマ皇帝が、キリスト教徒を憎んだように。

かくして、＜松下昇＞は、もっとも聖なる者となった……。テーバイのいけにえとなったオイディプスのように、彼は市民社会から追放された。しかし、＜松下昇＞のことを当の追放した者達が一様に恐れとまた、郷愁をもって、慕っていることは事実だ。＜松下昇＞は常に生存の根源に触れてくる。本質的なことを思考しようとする時いつもそこに必ず＜松下昇＞が、立っている。

不遜な言いかただが、松下昇は、私にとってモデル・ライバルであった。伝説的な意味で彼が神性へと昇華されない以上、彼は私にとって、決して到達できない欲望を振り撒く誘惑者に外ならなかった。

翻って、彼がライバルであるという意味は、私自身が彼自身を否定せざるを得ない何ものかに絶えず苛まれていたことを意味している。それは、私自身の生きんとする意志のなせる技であったのだろう。

松下昇は絶えず不可能な欲望対象について語った。それは、彼一流のイロニイに彩られており、それ故にこそ魅力的であったのだ。このイロニカルなバリケード闘争の貫徹が続けられた時、私達は自分の本当の敗北を知った。もしも、松下昇がいなかったなら私達は本当の意味での敗北を知らなかつただろう。たぶん、自己嫌悪と、他者不信の笑みを浮かべながらムルソーの不条理を弄んでいたかもしれない。

バリケードが解除されて、一挙に奈落が見えた時、闘いが本当の深みへと入り込んだのだが、ただ、闘いを具体性の反射運動へと取り込もうとする者だけが、街頭闘争や、テロリズムや、乗っ取り行動や、銃撃戦に走った。それは、いきずりの打ち上げ花火であり、用意周到に準備され、腐りかけている社会のシステムのアキレス腱を切って落とす、といったそのような意味での切断では有り得ないものであった。

松下昇がイロニックであったのは、決して解決や、結論を提示しなかったことである。それ故に人々は彼から、はぐらかされた答を聞き、あるいは了解不可能な答を聞いたと思ひこんで、いらだったりした。それは、皆、かれの答は問うものの方にこそある、というイロニイを弁えないために起こる困惑なのであった。

しかし、彼の戦術と戦略は強き者の仮装的なく権力>の連鎖、なかんずく《権力なき権力》というパラトックスをめざすものであったため、十分に弱き存在にすぎなかった共闘者から裏切られ続けた。

彼は、いけにえの山羊として、市民社会から追放された。しかも、驚くべきことに『呪われた者』の役割を積極的に買って出たものは、彼自身であった。ある共同性の全員一致の暴力によって屠られた者はまた、その共同性の災厄を祓ってくれた救世主でもある。そのために、彼は充分『聖化』される理由をもっている。彼は全共闘の隆盛と崩壊という全過程に付き合い、その不幸、災厄の祓い清めであった。

それにしても、一新されたのは、いったい何であったのだろうか。そして、あの『試み』は、もはや<遠い夢>に過ぎない何者かであるというのだろうか。

松下昇の生きかたは、ある意味で60年闘争を生きた者への『答』であり、同時に70年へ向かっての『問いかけ』でもあった。『法廷』や、『国家』や『革命』を主題としながら、彼は最も困難な道を選んだ。状況場への浮沈の激しい政治闘争の世界に最後まで落ち着いて殉じていった。もちろん、市民社会から追放され、スケープ・ゴートとして、闘争の全重量を担おうとした苛烈な生は彼の家族を、沈鬱な時に追いやることもしばしばあったろうと思われる。イエスは、故郷を捨て、妻をも、母をも持たぬ者であった。闘争の終焉後、7年の時が経った時、闘争時代に身籠もられた子が亡くなった。亡き子を六甲の山中へ葬る計画が立てられたが、中断されたようである。その子の死は、闘争の死を象徴したようでもあった。

たんぽぽの綿毛が舞い、バッハのフーガが流れていた晴れた日の六甲山の山並が懐かしく思い出される。それは、激烈な闘争への序曲でもあり、また終局的な夢のようでもあった。松下昇のはらんでいたものは、『国家』の解体や『革命』の解体より、もっと遠いものであったように思える。つまり、既存の政治権力の解体や、政治・社会的な革命構造の出現や、といった事よりも、もっと深い原型的な事を指向しているように見えた。そのことをアナキズムと一蹴する立場は、すぐさま政治的な有効性の論理に足を掬われてしまうことになるだろう。なるほど、私達の現世の肉体も、魂も、政治的な有効性や、生活の現実性に深く浸食されてはいる。しかし、原型的なことを指向するということは、更にそういう有効性の現実を構造化している根拠にまで遡って、生全体を再把握することを意味しているのだ。しかし、残念なことに、松下昇の試みはこの根拠への問いと、現実の政治権力との抗争とが密接に結付いていた為、『根拠への問い』を純粹に切り出して世間一般に訴えることができなかった。むしろ、こう言ったほうがいいだろうか、つまり、彼の『行動』そのものが『根拠への問い』そのものだ、といった具合に一元化されていたために、彼の欲望する世界への同意は、同時に運命共同体への同意でなければならない、と受け取られたことだ。それは、『被告』という立場で、闘争の総責任を引き受けながら、〈仮装被告団〉としてバリケード闘争を、更に全社会的視座から革命の革命として位置付けることを意味していた。この法廷闘争の段階で、時代は様々に〈力〉の問題を提起した。それは、主要には暴力として次々に噴出してくる意志の顕現の問題であったが、この暴力は一方では革命党派の同族間争いとして、国家権力との対決の不可能性を隠蔽するための、また現実的には、供儀を行うことによって自己存立を図り、革命の予行演習という名の純血統種の育成と訓育という意味をもっているように思えた。

更にまた、一方では、退路を絶たれた反攻としての匿名のテロリズム、無差別のテロリズム、銃撃戦、飛行機乗っ取りという形での諸々の暴力の噴出があった。統一権力を打ち立て得ない諸党派の段階では、個別の暴力による自己主張が唯一の打開策と信じられたのである。しかし、これらの暴力に共通していたことは、予言性ではなく、絶えざるカオスへの引金にだけなっている、ということだった。行き着く先の『虚無の虚無』だけが差し出されていた。義戦と犯罪との紙一重のところで、双頭の顔が見え隠れしていた。予言を持たない暴力は既に様々な意味で革命からは遠い。

松下昇の抵抗は、このような中であって、法廷で卵を投げるといった、たわいないものであったが、このイロニックな行為、このフェールズはある意味では『予言的』な暴力に属するものであったろう。法廷を茶化し、国家を無視する蛮行として新たな『罪科』を重ねるこの『被告』に弁護団は弁護不能として投げ出し、裁判官は『力』を行使して、この『被告』を遮ろうとした。——私が知っている松下昇は、ここまでである。

『被告』という立場に立つことによって、彼は一種の根拠を問う立場に移っていった。松下昇の立たされた位置は二重の立場である。一つは、革命を指向するテロリズムの立場と、彼自身の立つ立場の『暴力性』の問題を提起すること。彼を市民社会から追放した者達こそ暴力的なものである、と宣言すること。

しかし、そのような暴力性への告発に先立って人間の生存の根拠を明らかにすること。たんぼぼの綿毛の幻影の彼方にすべてのものが断罪された後、それでも、またそれ故に、生きる根拠がそこに有ると宣言すること。それが彼の立場でなかったとしたなら、我々は彼をみくびっていたことになるだろう。

——遠い夢、まことに『遠い夢』。彼のことを思う時、微かな記憶の中で、この言葉が舞い落ちてくる。しかし……既に、時は過ぎ行いた。

1976年="3(?)の  
とくなが氏の文章

1992.5.10

元正章氏より提供される。

5.13

友田氏から松下へ